

ガダマーの『真理と方法』執筆時の問題意識の明晰化

下山千遥(京都大学)

ハンス＝ゲオルク・ガダマー(1900-2002)は、「哲学的解釈学」「地平融合」などのキーワードが常識として共有されているように、我が国においてもその思想が非常に影響力を持っている哲学者の一人である。ガダマーの思想を研究対象として扱う際に、最重要視されるのが、1960年によく出版された彼の著『真理と方法(Wahrheit und Methode)』である。

この『真理と方法』において、彼の思想の核心は最も如実に現れており、これを精査することによってその思想体系を俯瞰することが可能であると、従来のガダマー研究においてもしばしば考えられている。(巻田、2019)

しかし、この『真理と方法』がガダマー研究の基礎となっているにもかかわらず、その成立についてまとめられた先行研究は管見の限りほとんど存在しない。唯一有力なものとして Grondin(1992)が存在するが、この論文において Grondin も明記しているように、ガダマーの文献学的な調査は他の哲学者と比べても圧倒的に少なく、『真理と方法』成立事情も、現状ではこの Grondin の論文から垣間見えるものしかわれわれには見えてこない。

この状況には、ガダマーの資料整理が十全に行われていないという問題が大きく関わっている。ガダマーは、死後 70 年以上経過しておらず、そのため著作権の都合上、著作資料すべてを刊行することは現在困難となっている。とはいえ、ガダマーの著作は 1986 から 1995 年にかけて全集(*Gesammelte Werke*)が編纂されているのだが、ガダマーの生前に完結したために、2002 年に没するまでの著作がこれらには含まれていない。また多くの研究者が指摘しているように、精神科学(人文学)について扱った未刊行資料はハイデルベルク大学を中心に、マールブルク大学などドイツ国内の方々に収められている。にもかかわらず、どの資料がどこに収められているかなど、少なくとも我が国においてはそれらについて正確で詳細な情報を得られない状況にある。

Grondin は前述の論文を発表した同雑誌に、ハイデルベルク大学の附属図書館に所蔵されたガダマーの手稿である『真理と方法』の初稿を、生前の本人からの確認を経た上で一部公表している(Gadamer, 1992)。公表された序文の数ページからも、精神科学の意義について中心的に論じた著『真理と方法』がどのような動機から執筆されたかということが示唆されている。

これを詳述すると、以下のようになる。ガダマーが美・歴史・言語を『真理と方法』でそれぞれ第一部、第二部、第三部と割り当てて取り上げたのは、そこに通底する課題である「理解 Verstehen」「解釈 Interpretation」について、さまざまな仕方でもって語るためであった。そして、「理解」「解釈」が問われなければならなかったのは、他にもない、精神科学の“方法”について精査し、自然科学の対抗馬としての(=自然科学として捉えられている、近代科学的方法の枠組みに沿った、自然科学とはただ対象のみが異なる学問としての)精神科学という像を破壊すること、そして、その実践においてまさに起こっている、精神科学の営みという現象を記述することであった。

『真理と方法』の完成稿において、まず序論においては「理解」「解釈」を説くにあたっての哲学における意義、精神科学における意義がある種融合した形で述べられているが、そののちに扱う

テーマとなる、前述の美・歴史・言語の問題とも折り重なった議論が展開されていき、ガダマー自身の問題意識が一見するとかえって見えにくい状態となっている。また、もう一つ具体例を挙げるならば、『真理と方法』第一部第一章第一節では「教養」「共通感覚」「判断力」「趣味」と小節をたて、様々な著作や哲学者などに言及しながら、自身の思想体系に占める精神科学の立ち位置がその都度話題にかかわる仕方でも語られる。ここでも、ガダマー自身が抱く精神科学のあり方が、そのままでは輪郭がぼやけたものとしてしか受け取られなくなっている。

本発表の目的は、Grondin の前述の論文や公表されている序論の一部を参照しながら、ハイデルベルグ大学附属図書館が所有する『真理と方法』初稿の手稿を実際に手に入れ、これを用いることで、上記の課題を解消する手立てを得ることである。すなわち、ガダマー自身のもつ精神科学のあり方をテキストから直接的な仕方でも取り出す。またこの際、マールバッハの文書館に存在する、『真理と方法』執筆時にガダマーが開講していたゼミナールに関する資料を入手し精査することで、購読で読まれていた哲学書やガダマーによるその解釈などを手がかりにして、この目的を達成するための補助線とする。これによって、ガダマーの当時の問題関心や、『真理と方法』完成にいたるまでの思想の途上の道を照射することを企図する。

(本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。)

参考文献

巻田悦郎、ガダマー入門ー語りかける伝統とは何か(新装版)、アルテ、2019。

Hans-Georg Gadamer, Wahrheit und Methode. Der Anfang der Urfassung (ca. 1956, hrsg. v. J. Grondin & H-L. Lessing), in: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd.8(1992-1993), Göttingen 1992, S. 131-142.

Jean Grondin, Zur Komposition von »Wahrheit und Methode«, in: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd.8(1992-1993), Göttingen 1992, S. 57-74.